私の私による私と皆のためのイギリス旅行

経済学部
現代ビジネス学科 3年
藤井　千尋

旅は道連れ世は情け、ということわざがある。意味は、『旅には連れが居る方が心強く、同じように世の中は互いに情をかけあい助け合っていくことが大切である』―江戸のいろはがるたから生まれたことわざだ。その昔は旅という行為自体がとても骨が折れるもので、世の中を生きることと同じように、とても一人で出来るものではなかったのだろう。

時代は変わり、今では一人旅もやろうと思えば思いのまま出来る時代になった。私もその一人で、大学3年生の夏、生まれて初めて一人で海外へ旅行をしてきた。場所はイギリス、期間は7泊9日。

きっかけは好きな小説で主人公の女性が一人で海外を旅していたことである。その影響で海外の一人旅に対して強い憧れを持っていたし、何より私は今の自分にあまり満足していなかったので旅行をきっかけに変えたい・精神的に成長したいという思いがあった。

そういう訳で初めての海外一人旅は『心の筋肉を鍛える』を目的にして行こうと決めた。楽しいことばかりではないかもしれないが、それを乗り越えて自分に自信をつけたい。また、短期間ながらも日本語圏から、普段の生活からも離れて自分が恵まれている環境に住んでいることに感謝したいという副目的も設定した。

設定した目的を最大限果たすためにパッケージツアーではなく、個人旅行という形態をとった。さらに、旅行で必要な具体的な手配も自分で行った。例えば現地の宿泊施設は自分なりにインターネットで調べて予約したし、ガイドブックを参考にしながら現地での行動プランも立てた。初日のホテルと現地での交通面の手配は旅行代理店へ自分で直接足を運んで交渉を行った。それでも現地で全く一人というのは不安な面もあったので、父の知り合いの方に協力を依頼して現地での行動面のサポートをして貰った。

今回この旅行を実現するためにあれこれとはりきっていた私を温かく見守りながら力を貸してくださった方々に心から感謝している。中でも、一人旅を日本でも現地でもサポートして下さった父の親友であるMさん、Mさんの知り合いでロンドン滞在中には大変お世話になった現地在住のIさん、今回旅行をする機会を下さったTさんと娘さんのSさん。そして、両親には本当に心から感謝している。

結果的に初めての海外一人旅は実に波乱万丈なものになった。限られた枚数の中で全てを書くことは厳しいが、少しでも経験した出来事から私が感じたり得たものをこの場で紹介することが出来れば幸いである。

＊

1日目となる8月23日はとても晴れていて、私は『あぁ、海外に来たんだなぁ』と興奮冷めやらぬ状態で空港に降り立った。なんせ、自分で思い描いた出来事がついに実現したのだから！

しかし、ここからは母国語が通用しない。果たしてカタコト英語で7泊9日間を無事に過ごすことができるのだろうか、とあちらこちらで飛び交う英語を聞きながら今更不安になってしまう。でも、やるしかない。12時間のフライトで鈍った身体と気力を奮い立たせて地下鉄経由でロンドンの中心部へと入った。なるべく不安を押し殺して、日本から持ってきた期待に胸を膨らませながら。

2日目の8月24日はあいにく朝から雨が降っていて、何故か私の気分も少しふさいでいた。初日のホテルは一泊のみの予約なので、朝から次の宿泊施設へ移動して荷物だけ預かって貰い、私は今日一日お世話になるイギリス在住の日本人女性Sさんと大英博物館で落ちあった。

予定ではSさんとロンドンの観光地をいくつか回る予定だったのだが、今になってあまり乗り気になれない。そうなった理由もはっきりしないので取り敢えずは博物館内のカフェでSさんと他愛ない話で気持ちをなごませ、午後は予定を変更してロンドンのタウンウォッチングを楽しんだ。

私はタウンウォッチングで行ったチャイナタウンでSさんと昼食を取りながら、昨日と違い今朝から元気が出ない理由について考えた。

「うーん、時差ボケが関係しているんじゃないかな？」

「時差ボケ？…確かに眠いような気がします」

私は午後2時を過ぎた頃から段々眠くなってきて、気を抜くと居眠りしてしまいそうだった。昨晩の寝不足も、時差ボケが原因かもしれない。正直、時差ボケを侮っていた。

「あとは、カルチャーショックとか」

「ロンドンの人って、意外と冷たいですよね。なんていうか、ガイドブックにはイギリス人は親切って書いてあったんですけど…」

「確かに親切な人は多いよ。だけどロンドンは、イギリスの中でも人種のるつぼって言われる位色々な国の人が居るからね。観光客も多いもん。純粋な英国人だけじゃないから、そう感じることがあるのも仕方ないよ」

ロンドン市内を歩いていると、黒人やアラブ系の人々の姿を多く見かける。そして、一大観光地であるロンドンには世界中から観光客が訪れる。慣れない土地で色々な人に囲まれて歩いていると、それだけで気疲れしてしまう。

「他にも、日本とイギリスの文化の違いというか考え方の違いに戸惑ったりしています」

私がこう漏らしたのは、日本とイギリスのサービス業に対する姿勢の違いに戸惑っていたからだ。

主に買い物をしていると、イギリスでは日本で言う所の『お客様主義』は存在しないに等しいということに気づく。普通に冷たい店員さんも居るし、そういったことに慣れていない上に語学力にも乏しい私は疎外感を感じてしまう。むしろこういう点では、日本のサービス業に対する考え方が素晴らしすぎるのかもしれない。あるいは慣れない環境に来て、少しの違いにも敏感に反応してしまう位、無意識のうちでは緊張していたのかもしれない。

ガイドブックを穴があくほど眺めたところで実際来て見ないと分からないことはある。初日に膨らませた期待は旅行に来て2日目で呆気なくしぼみ、酷いホームシックに陥った。家に帰りたい。一人で居るのは不安だから誰かと居たい。だから私は今晩予約していたミュージカルをキャンセルして、SさんとSさんの友人のディナーに混ぜて貰った。しかし部屋に帰ると、誰とも関わらないで旅行が終わるまで部屋に閉じこもっていたくなった。もう本当に何もかも投げ出して家に帰りたい。妙な矛盾が一人きりの夜に重く圧し掛かって、一晩中ずっと胸が苦しかった。

3日目となる8月25日の朝は酷く憂鬱な目覚めで、今日お世話になる日本人女性のIさんに会う気になれない。電話して自分に状態を伝えたら、

それでも一人で居るよりは誰かと居た方が良いと言って当初の待ち合わせ場所を変更して私を最寄り駅まで迎えに来てくれた。

Iさんと何気ない話をしながら散歩する時間は、私のホームシックを紛らわせて気持ちを明るくしてくれた。昼ごはんの前に公園で話した時間は、旅行の中でも鮮明に残る想い出の一つだ。

「ロンドンの中にも、こんな素敵な公園があるんですね」

「同じ都会でも、東京は遊ぶことにお金が掛かるじゃない？でも、ロンドンの人は遊びにお金をかけないで楽しむ遊び方を知っているの。公園でのんびりするのはタダだから」

一歩公園の外を歩けば東京とあまり変わらない都会なのに、決して広くない公園の中はロンドンの人々が昼間から至るところでのんびりしている。会社の昼休みに来た会社員、仲睦まじいカップル、親子連れ、寝転がって新聞を読むおじさん…。それぞれが思い思いに自分たちの一時を楽しんでいる。

今ではたった半日で来ることができる距離になったのに、歩いている人も暮らしぶりも、言語も日本とは全く違う。それは私にとって妙な感覚だった。

しかし、一人になると、どうしても私は家に帰りたくなる。Iさんと楽しい時間を過ごして、もう自分は大丈夫だと元気を貰っても静かな部屋に一人になると暗い気持ちになって、つい家族に弱音を綴ったメールを送ってしまった。

渡英する前はあんなに根拠のない自信に満ちていたのに、今では全く自信を無くしていた。初めて訪れる土地を出来る限り自分で動こうとするとそれなりにスキルが必要になるのは分かっていたはずだが、どこかで『なんとかなるでしょ！』とタカをくくっていた自分が恥ずかしくて堪らない。自分を鍛えようと思って来たのに、結局臆病で泣いてばかりの弱虫の自分に、他の人に甘えてばかりの自分の未熟さに激しく嫌気がさした。

気付くと私は何時間も眠っていて、廊下のうるささで目を覚ました。23日から25日は夏期開放の大学寮を利用しているので、他の部屋の人が廊下で騒いでも緊急事態という訳ではない。しかし、この時の私はとてもナーバスになっていて、多少騒がしくても許せるほどの寛大さは持ち合わせていなかった。だからと言って眠ることも出来ない。

「Iさんに会いに行こうかな」

私は別れ際にIさんが言ったことを思い出していた。

『一人が辛くなったら、仕事中でも構わないからいつでもいらっしゃい』

その時はお守り代わりにするつもりだったが、廊下の騒がしさも私の心細さも夜じゅう消えそうになかった。私は思い切って、Iさんの言葉に甘えて仕事場へ行こうと考えた。

Iさんは夜に仕事をしているので尋ねても寝ているということはないが、問題は今の時間帯である。夜の12時。見知らぬ土地を旅する女性一人が出かける時間にしては少し危険な時間帯だ。でも私は躊躇しなかった。一人で朝まで孤独で眠れない時間を過ごすよりは冒険してまで信頼できる人と一緒に居たい。

Iさんの仕事場はここから地下鉄の駅で二つ分離れた所にある。とは言え、地下鉄や深夜の公共バスを利用するのは流石に恐い。そこで、ロンドン名物のブラックキャブを使うことにした。流しのタクシーを拾うのは日本でもあまりしない。まさか、こちらへきて初めてのタクシーが夜中の12時になるとは…。色々な意味で背筋がぞくぞくしたのを今でも覚えている。

私はガイドブックに載っていた通りの手順でタクシーに乗った。まず、横に手を上げて流しのタクシーを止める。次に、外の扉越しに運転手に行き先を告げる。そこであらかじめ出かける前にIさんに電話して教えて貰った住所のメモを運転手

に見せて、こう言う。

「Could you take me this address, please?」

運転手の許可が下りるとタクシーに乗車することが出来る。イギリスのタクシーは手動なので、自分で扉を開けて後ろに乗りこむ。たったこれだけの動作をしただけで私の喉はからからで汗をびっしょりかいていた。でも、実際やってみると自分が思っていたほど難しいことは何もなかった。

10分後、無事にIさんの仕事場へついた。そのあとはIさんの仕事が終わるまで待ち、終わったあとは家に連れて行って貰った。そして温かなお風呂を借りて眠ることが出来た。嫌な顔一つせずに迎えてくれた恩を、私は一生忘れない。また、勇気がないと思いつつ大胆な行動を取ったことも忘れないだろう。

8月25日、4日目となるこの日の印象は正直あまり無い。何故なら午前中に両替所に行って帰りに買い物をしただけで、午後はうっかり寝てしまったからだ。少しずつロンドンの空気にも慣れてきて近場の観光をしようと思ったのだが、未だ強力な時差ボケパワーには叶わなかった。

ただ、夜はもう一つ予約していたミュージカルを観に行くことが出来て、これはとても楽しかった。2日目に比べたら大きな進歩だ。終わった時間が遅かったので帰りは昨日と同じようにタクシーを利用した。その時の運転手さんはとてもフレンドリーで、一日一人で寂しかった私の気持ちが和んだ。

8月26日の5日目は昨日に比べて起きた出来事を強烈に覚えている。記念すべき、迷子の日。

私はストラトフォード・アポン・エイヴォン駅を出てからB&Bまでの道のりの途中で途方にくれていた。ちなみにB&Bとは、ベッド&ブレックファストの略で、その名の通り朝食付きの小さな宿泊施設のことである。

「どうしよう、このままじゃまた迷っちゃう」

実は今日から2泊はロンドンを離れてストラトフォード・アポン・エイヴォンに宿泊することになっている。ここはシェイクスピアゆかりの地で、小さい街ながら観光客も多い。私は朝早くロンドンを出て、2時間かけてストラトフォード・アポン・エイヴォンへ移動してきた。

しかし自分の想像以上に田舎なところで、駅を出た瞬間からどう歩いたら良いか分からない。とりあえず駅の前の小さな案内板を見て、宿泊所の住所と照らし合わせ歩き出したのだが直ぐ分からなくなった。

駅は街の中心部から離れているので人の姿もそれほど見掛けない。車の通りは多いが、それは単なる移動であって止まる気配も無く、流しのタクシーも走っていない。ストラトフォード・アポン・エイヴォンの詳しい地図を手にいれれば良かったのだが、この時の私は冷静さを忘れ半分パニックになっていた。

「2回も迷子になるのは嫌だよ…」

このときの私にはストラトフォード・アポン・エイヴォンに辿り着くまでに乗り継ぎで1回迷ってしまい、予定より1時間遅れて来たといういきさつがあった。1回目の迷子のときに感じた不安感をぬぐい去ることが出来ない。

それ故にもし、このまま宿泊施設に辿りつけなかったら野宿かも…なんて冷静に考えればおおげさなことも、このときはかなり真剣に考えていた。

緊張と不安が頂点に達した私は、考えるより先に日本の家族へ泣きながら電話をかけていた。向こうは夜の八時なのでおそらく家族は全員居るだろう。電話に出た父に事情を説明すると、電話越しに父は、

「予約したB&Bは日本人が経営者だから日本語で対応してもらえるかもしれない。とにかくB&Bに電話した方が良い」

というアドバイスをくれた。偶然か必然か、私

が予約したB&Bはたまたま日本人がオーナーだった。それに対して私は、

「英語で会話するのは面と向かってでも大変なのに、電話でするなんて無理だよ！オーナーが出てくれるとは限らないし、英語だったら自信ないよ…語学力が無いのに一人で海外に来るなんてやっぱり無謀だったし、そんな自分が恥ずかしい…」

と今の状況とは関係の無い愚痴まで呟いてしまった。結局今の状況ではそれしか方法が無いので、父に励まされて電話した。

すると、当たり前のことだが電話の応答は英語だった。自分の英語が通じるのかビクビクしながら英語で自分の名前を告げると、

「あ、藤井さんですか？」

と次の言葉が綺麗な関西弁で返って来たので私はびっくりしてしまった。運よく、オーナーが直接出てくれたらしい。そこから私は事情を説明し、どうやったら辿りつけるかを聞いた。すると、

「私が藤井さん迎えに行きますわ。今、どこにいてはります？」

と返事が返って来たので私は更にびっくりした。親しい間柄ならまだしも、初対面の人間に対してオーナーが直々に迎えにきてくれるという出来事が私の中では予想外の出来事だったからだ。それ以上にオーナーの親切心に心を打たれて、このオーナーが経営するB&Bはとても素晴らしい所だと確信した。

そのあと、私は駅まで戻ってオーナーを待ち、数分後に顔を合わせた。オーナーの名前はOさんと言い、電話越しに感じたイメージ通り、優しそうで品のある中年の男性だった。家族に報告の電話をかけた後、車に乗ってOさんが経営するB&B『ムーンレイカーハウス』へと向かい、私は事なきを得た。

冷静に振り返ると単なる迷子で号泣するか、と思うのだが、あの時は本当に心細かった。見知らぬ土地で迷子になるというのは自分の予想以上に恐怖だということを思い知らされた。

5日目の8月27日の日曜日は、のんびりと過ごした。午後には街へと出かけて、お土産を選びに通りをぶらりと歩いた。

この日の夜は、オーナーさんとオーナーさんの奥さまと、私と同じく宿泊客のイギリス人のおばあちゃんと四人で街へ夕食を食べに出かけた。

話によれば、イギリス人のおばあちゃんは80歳で、一人、このムーンレイカーハウスに一週間も滞在しているそうだ。年をとっても女性が一人自分のやりたいことをやっている姿にとても憧れを抱いた。私は年を取ったらおばあちゃんのようになりたい。

そして迷子を経験して何かが吹っ切れたのか、ここへ来て私のホームシックも少しずつ収まって来て、部屋でくつろいでいると不思議な幸福感に包まれた。残り2日でようやく旅行が楽しくなってきた。この日は良く眠れた。

8月28日、6日目となる今日はストラトフォード・アポン・エイヴォンからロンドンへ戻って父の親友であるMさんと合流した。今日は現地のホームパーティーへ連れて行ってもらえることになっていた。

Mさんはロンドンに数年間駐在経験があり、今日お邪魔するホームパーティーはMさんの息子さんであるYくんの小学校時代の同級生の家だ。Yくんも私と同じ時期位にロンドンへ来ていて、今日まで滞在することになっている。そういう訳でホームパーティーの帰りはYくんも合流してロンドンへ戻る。今回私はご好意で参加させて貰った。昼過ぎにMさんと合流してまずはロンドンの日本料理屋さんで昼ご飯を御馳走になった。

「イギリスでも日本食はブームになっているけど、味はどう？」

「美味しいです。外国で食べるとどうしてこんなに美味しく感じるのかな」

私は注文したタンメンを食べながらついこう漏らした。地元のラーメン屋を思い出して懐かしくなった。

昼食のあとは鉄道に乗り、午後四時位に家へ着いた。Yくんの同級生の家は、イラン人のお父さん、イギリス人のお母さん、三人の息子さんの五人家族だ。他にもホームパーティーには近所の家族が一組参加していて、イタリア人のお父さん、スコットランド人のお母さん、息子さん、息子さんのお友だちの四人が居た。そこに私、Mさん、Yくんが参加して計十二人でのパーティーとなった。

皆とても優しくてパーティーは終始アットホームな雰囲気で行われた。何よりも英語もあまり喋れない初対面の私に対して誰もがフレンドリーに接してくれることが嬉しくて堪らなかった。

私も自分なりに英語を使って気持ちを伝え、簡単な会話が成立するだけで心が躍った。会話をするだけでこんな気持ちになるなんて、随分と久々だ。

「今度イギリスに来た時は、またうちへおいで」と帰り際に言われたときは、とても胸が熱くなった。ここに書ききれないほどホームパーティーでは様々な楽しい出来事があって、私は数時間でもファミリーの一員になれたことが凄く嬉しかった。

その後はYくんも加わって三人でロンドンへ帰った。小さなホテルに泊まって、MさんとYくんは次の日の朝早くにそれぞれアテネと日本へと旅立った。

8月30日の最終日は、やり残したことをひたすらしていた。最初の旅行計画で達成されるはずだったお楽しみの観光が予定通りに行かなかったことがどうしても心残りだったので、時間が許す限り観光した。観光目的でなかったとは言え、せっかくイギリスに来たのに見どころを見ずには帰りたくない。一つも悔いを残さずに帰りたくて、最後は半ば意地で回っていたように思う。そのせいで帰りの飛行機は熟睡してしまい、首が痛くなった。こうして波乱万丈な旅行は無事に終了し、日本へ帰国出来た訳だが、嬉しかったことがある。それは母がお風呂とお寿司を用意してくれたことだ。

私は思わず、こう言った。

「いやあ、イギリスで湯船につかれたのは初日だけだったからすごく入りたかったんだよねぇ！お寿司も最高だよ。日本万歳！」

＊

旅行を終えて、私は『心の筋肉を鍛える』という目標を見事達成した。ホームシックや迷子、初めてだらけの出来事を乗り越えて精神的にも成長出来たと思う。

そしてもう一つ、旅を通して思わぬ収穫があった。『新しい視点』を得たことだ。それは『他』の視点、例えば『他国』、『他者』…など『客観的』な視野ともいえる。

『他国』で言えば、イギリスと日本の違いから起こるカルチャーショックであったり、街中で日本人以外の人びとの生活を垣間見たり、6日目にロンドンで日本料理を食べたこと…。これらの例を通して幾度となく妙な感覚に陥ったのは、これが『日本』を中心に考えているからでは無く、『他国（イギリス）』を中心に日本を見たから起こりえた現象だ。それに、他国視点で見ることで日本の素晴らしさを改めて実感することが出来て、副目標も達成出来た。

また、私は道連れが居ない一人旅をしたことで『自分』の未熟さや不甲斐なさを毎日のように感じた。しかし、そこでIさんやSさん、Mさんを始めとして様々な人から無償の親切を受けた。自分が初めて行くような場所で、しかも日本語が通じない海外で、他者に無償で助けられるという出来事は生まれて初めての経験だけに衝撃的だった。

おかげで私は日本に帰ってから『他者の存在』を以前より遥かに、強烈に意識するようになり、

これが『他者』の視点で物事を考えるきっかけにもなった。

つまり、私は『自分』だけの世界で物事を考えることが無くなった。『自』という視点に『他』が加わり、物事をより冷静に客観的に見つめられるようになったと思う。それに、以前よりももっと他者の気持ちを考えるようになった。

全体を振り返り、旅行をして本当に良かったと思っている。旅行中は辛いことも多かったが、その分得るものも大きかった。今回の旅で受けた沢山の親切は、これから私が生きていく中で、違う形であっても返していきたい。

そして私はまた海外へ行くつもりだ。もっと英語を勉強して、今度は会話を楽しみたい。その時の旅行記は、いずれどこかでお見せできればと思う。